

張 東翼 著

モンゴル帝國期の北東アジア

小 川 伸

本書は、新資料の紹介と分析を中心として、一三〇一―一四世紀におけるモンゴル期の「北東アジア」、即ちモンゴル・高麗・日本の交流の様相を、政治史を軸に述べたものである。著者の張東翼は、現在慶北大學校師範大學教授を務めており、本人の博士論文に基づいた『高麗後期外交史研究』を嚆矢として『元代麗史資料集録』、『宋代麗史資料集録』、『日本古中世高麗資料研究』といった一〇世紀から一四世紀までの中・韓・日の三國交渉に關する資料集成を公刊し、この分野の研究に多大な貢獻を果たしてきた。^①特に『高麗後期外交史研究』は、高麗王府と征東行省に關聯する資料を博搜し兩者の關係に對する理解を刷新したという意味で研究史上のメルクマークとなっている。こうした著作群だけでも資料集成・新資料の發見を重視する著者の姿勢がよくわかる。また、著者は一九九九、二〇〇三、二〇〇九年の各一年、計三年の間、京都大學に客員教授として招聘されていた。本書は、二〇一〇年に京都大學に提出された博士論文がもとになっており、京都大學への招聘期に涉獵した資料が多用されている。「あとがき」にも當時の思い出と共に本書の核心とでもいべき資料調査の重要性が述べられる。

一三世紀よりモンゴルがユーラシアを席捲すると、高麗はモンゴルの影響下に置かれるようになり、モンゴル・日本間の交流においても仲介者の役目を果たす。高麗とは對照的にモンゴルの侵略を免れた日本は、モンゴル・高麗との關係を

商人・僧侶のみを通じた非公式な交流にとどめて政治的獨立を堅持する。こうした歴史的な相違もあり中・韓・日はそれぞれ個別の問題意識と限られた資料から一三〜一四世紀の研究を行ってきた。日・麗、日・元關係史については我が國においても十分な蓄積があり、⁽²⁾ 總論としては中村榮孝が一つの到達點を示したが、⁽³⁾ その後も元寇・倭寇發生の原因などに關して數多の見解が提示されてきた。近年、水中考古學の發展により九州沿岸部の海中より元寇期の遺物や蒙・麗・日間の文物往來を示す物品が發掘され、同分野の研究はにわかに活況を呈しつつある。⁽⁴⁾ 一方、モンゴル時代史で多言語資料を利用した研究が進展し、パクス・モンゴリカの下で展開した政治・文化・經濟面での多様なひろがり目が向けられるようになった結果、⁽⁵⁾ 高麗史研究においても「モンゴルに事大する高麗」から「モンゴルの中での高麗」へと認識が變化しつつある。⁽⁶⁾ 地域概念の相對化をとなえる海域交流史の發展も、そうした状況を加速させているといえよう。⁽⁷⁾ 本書は、このような各分野の研究の進展を受け、元寇・事大期高麗・倭寇といった重要なトピクを蒙・麗・日それぞれの立場からとらえ直し、モンゴル時代の北東アジア地域の具體像を多面的に浮かび上がらせることを試みたものである。

先に本書の構成を示し各章の内容を紹介したのちに、私見を提示したい。

序章 研究の對象と動向

第一部 モンゴル・高麗・日本に關聯する新しい古文書資料

第一章 一二六九年「大蒙古國」中書省牒と日本側の對應（日本、『史學雜誌』一一四—八、二〇〇五年）

第二章 一三六六年高麗國征東行中書省の咨文についての検討（日本、『アジア文化交流研究』二、二〇〇七年）

第二部 高麗人と元の文人との交遊

第一章 新資料を通じてみた忠宣王の元での活動（韓國、『歴史教育論集』一三三・二四、一九九九年）⁽⁸⁾

第二章 李齊賢および權漢功、そして朱德潤

第三部 日本遠征の指揮官——金方慶と洪茶丘、そして戦争以後の麗・日關係——

第一章 金方慶の生涯と行蹟（韓國、『退溪學と韓國文化』四〇、二〇〇七年）

第二章 モンゴルに投降した洪福源および茶丘の父子（韓國、『歴史批評』四八、一九九九年）

第三章 十四世紀の高麗と日本の接觸と交流

終章 今後の課題

附録

第一章 京都大學所藏の開仙寺址石燈記の拓本（韓國、『歴史教育論集』三六、二〇〇六年）

第二章 一五七五年日本使臣團にかかわる古文書資料の検討——足利學校遺蹟圖書館所藏『續資治通鑑綱目』の

槽接紙調査——（韓國、『歴史教育論集』三五、二〇〇五年）

あとがき／初出一覽／引用資料目録／引用文献目録／資料名索引／英文抄録

序章では、「研究の対象」と「關聯研究の動向」、「本書の構成」が述べられ、本書の意圖するところが明らかにされる。特に、近年になって、中・韓・日の學界で各國の内部事情についてのみ個別的に研究が蓄積されてきた状況に變化が現れている點が強調される。モンゴル期の北東アジアという點においても、中國内の典籍資料に依據した政治史中心の研究から、石刻資料の利用、日本・韓國に所藏された資料の調査が行われたことで、研究の分野が多方面に擴大し内容も具體化しつつある。

第一部「モンゴル・高麗・日本に關聯する新しい古文書資料」の第一章「一二六九年「大蒙古國」中書省牒と日本側の對應」では、一三〇一七世紀までの日本と東アジア諸國との百十點あまりの外交文書が掲載された『異國出契』⁹⁾より、著者が再発見した一二六九年のモンゴルの中書省牒文と、モンゴル側の先導役となった高麗國から日本へ送られた牒文とを

主たる検討対象とする。この牒文そのものは既に先學の紹介を経て¹⁰⁾、今回の再発見によってより完全な解讀が可能となった。各牒文に綿密な検討を加えて一二六九年におけるモンゴル・高麗・日本の動向を整理した上で、稿末に牒文二通の翻譯を載せる。今回著者が『異國出契』より再発見した牒文二通は、一二六六年に開始された日本招撫のための第四次使節がもたらしたものである。中書省牒文には、發給者である中書省の宰相等五人が名を聯ねており、當時の國政の狀況を傳えている。三別抄の抵抗がまだ續いている中で高麗國より送られた牒文からは、モンゴルの要請を受けて澁々ながら先導をさせられている様子が文面より如實にあらわれている。この論考自体は従來の研究成果に大きな轉換を迫る類のものではないが、新資料の紹介という意味で蒙・麗・日關係の研究に裨益する所は大きい。

第二章「一三六六年高麗國征東行中書省の咨文についての検討」では、第一章と同様に『異國出契』に見える一三六六年の高麗國征東行中書省が發給した咨文について検討する。咨文の内容は、高麗國が日本國へ倭寇の横行に齒止めをかけるように要求する、といったものである。半世紀近く前の時點で、中村榮孝が『報恩院文書』に寫された同咨文の圖版と全文を掲載して検討を行ったが、¹¹⁾著者は『異國出契』中の同咨文の轉寫と比較することで咨文中の文字を補填し、中村氏の文書解釋の修正を行った上で章末に譯文を掲載した。その結果、文書の發給主體は征東行中書省ではなく高麗使節團であること、この當時の征東行中書省は大元國の出先機關としての性格を失い、獨自路線を取り始めた高麗國の外交文書取扱機關として機能していたことなどが明らかにされた。また、使節往來の經費に関する取り決めなども記されていることから、後の朝鮮時代における日本・朝鮮の公的な外交關係の端緒となったとも指摘する。

第二部「高麗人と元の文人との交遊」は文化面での交流を主軸としている。第一章「新資料を通じてみた忠宣王の元での活動」では、高麗忠宣王（一二七五—一三三五）のモンゴルにおける事績を取り扱う。忠宣王は質子（トルガク）としてモンゴルに送られ、モンゴルの一諸王兼モンゴル皇帝の宿衛として過¹²⁾し、武宗カイシャン・仁宗アユルバルワダの治下で國際的な文化人として名をはせた。また、モンゴルの後援によって二度高麗王に即位するものの王としての高麗滞在期

間は一年に満たない。

従來の韓國學界における忠宣王研究は、主に『元史』・『高麗史』などに依據していたのに對し、著者は中國側の文集・墓誌銘などの資料を介して忠宣王の活動の軌跡を新たに描こうと試みる。まず、『元典章』や文人・僧侶等の文集に見える忠宣王の記事を紹介・検討したのち、それらに基づいて忠宣王の生涯にわたる年譜を提示する。さらに、政治史とのかわりから青年期「前半」、青年期「後半」、壯年期の三段階にわけて文化的背景、政治的役割、佛教・儒教等のかかわりをそれぞれ述べる。成宗テムルの死後に起こった帝位争いにおいて、忠宣王はカイシャン擁立者の一員となるものの、中央官僚としての榮達を選ばず江南で元の知識階級と積極的に交流し佛教界での影響力を發揮した。カイシャンの後に帝位を繼いだアユルバルワダの下で、さらに活躍の幅を広げる。皇帝の庇護の下で趙孟頫等の當時の一流文化人が集うサロにも參與し、科擧復活の立役者の一員ともなった。しかし、英宗シディハラの即位後にアユルバルワダの與黨としてチベットに放逐され五年後に歸還を許されるものの、まもなくして大都で没する。このように忠宣王の生涯を述べたうえで、元朝との關係を最大限に生かそうとした忠宣王の存在によってモンゴルの高麗支配が進行したことは否定できないとする。著者の提示する新資料は文化活動方面の比重が高く、忠宣王の文化人・文化行政の擔い手としての側面がより強調された形となる。

第二章「李齊賢および權漢功、そして朱德潤」では、第一章で取りあげた忠宣王の周邊で活躍した高麗・モンゴルの文人の交遊に焦點を當てる。忠宣王は多くの高麗官僚を大都の邸宅に招き、モンゴル治下の文人と交流できるよう取り計らった。その中でも代表的な人物が朱子性理學の高麗への導入に功績を残した李齊賢（一二八七～一三六七）と、忠宣王の子忠肅王を廢位させ、忠宣王の姪潘王高を擁立せんとした權漢功（一二六九～一三四九）である。まず、新資料として『百爵齋藏歷代名人書法』「元兪午翁・馮海栗等十二家投贈朱澤民詩文」に集録される、李齊賢・權漢功から朱德潤（一二九四～一三六五）へ贈呈された詩文を紹介した上で、李齊賢・權漢功の主君である忠宣王の文化面の業績と、モンゴル皇帝の庇

護の下、多くの文化人が招かれた忠宣王のサロンを中心としてモンゴル・高麗の文人が學問的に交流した様相を描く。ここで挙げた詩文は李齊賢・權漢功の自筆であり、當時の文化人のあり方の一端を示している点でも注目すべきである。

第三部「日本遠征の指揮官——金方慶と洪茶丘、そして戦争以後の麗・日關係——」はモンゴルの日本遠征において侵攻軍の司令官となった二人の人物に焦點をあて、同時代に對照的な生涯を送った彼らについて高麗國にとつての利害を基準とした評價を下す。第一章「金方慶の生涯と行蹟」では、反モンゴル勢力たる武臣政權が起こした三別抄の亂を鎮壓して功を擧げる等、モンゴル支配下で高麗國の運営に携わりながら、高麗軍元帥として日本遠征にも参加した金方慶（一二二一—一三〇〇）の生涯を取り上げること、モンゴル・高麗間におきた大變動を一個人の視點から見つめなおす。「官僚生活」・「將帥としての才質」・「日本遠征の過程」・「親族集團」・「義子および幕客集團」・「競争關係にあつた人物」・「敵對關係にあつた人物」・「後援關係にあつた人物」・「學問と處身」・「現實對應意識」に分けて分析を加えている。特に高麗軍元帥として活躍した日本遠征の經過について詳細な検討がなされる。その上で、金方慶が高麗のために果たした役割、將帥としての才能、幾度も誣告されながらも高麗王家へ忠誠を盡くした點等から、金方慶を義臣として高く評價する。

ただ、金方慶を取り巻く親族・婚戚・同僚・モンゴル官僚等の人物關係を整理しているものの、金方慶との關係や各事件に對して周圍の人物がいかに參與したかについての分析の上でやや推測が多い點が氣になった。

第二章「モンゴルに投降した洪福源および茶丘の父子」では、高麗國に忠義を果たした金方慶とは對照的に、高麗人であるにもかかわらず「蒙古の忠犬」としての役割を果たした洪福源・茶丘の父子がモンゴルの下で如何なる生涯をおくったかを述べる。一二三一年、麾下の將兵三千人とともにモンゴルへ投降した洪福源は、一二三三年よりモンゴル軍の高麗侵入を幫助し、五度にわたる高麗への侵攻をなした。しかし、憲宗モンケ末年の一二五八年には、同じくモンゴルへ投降した高麗王族の永寧公と不仲となったためにモンゴル皇族である永寧公の夫人に誣告され、モンケの派遣した官吏によつて殺害される。

洪福源を繼いだ第二子の洪茶丘は、質子として宿衛に勤務するうちにクビライの寵愛を受けたことから出世の糸口をつかみ、高麗侵攻・日本遠征の將として拔擢された。長らく高麗に駐屯し、遼陽でおこった乃顔の亂でも拔群の活躍を見せ、遼陽行省を主宰する地位に到る。第一章でも取り上げた金方慶の誣告事件に際しては、洪茶丘が自ら拷問を課す等、モンゴルの高麗國に對する影響力の強化を積極的に推進した。モンゴルに進出した殆どの高麗人が、高麗と一定の關係を有し續けたのに對し、洪茶丘とその一族は完全にモンゴル人として高麗の支配に關與したとされる。その後も洪一族は遼陽に根を下ろし、高麗王家ににらみを利かせる存在としても機能した。結論として、ほかの行省とは異なり遼陽行省の宰相職が洪氏一族によって世襲され、諸侯として特異な地位を確保したこと、元が滅びた後も洪氏一族は高麗に歸らず北元と運命を共にしたことを指摘する。

なお、本章は著者も「序章」で「歴史上の人物の褒貶のために企劃された論文であるため、アカデミックではない點もある」と豫めことわっているとおり章末に参考文献として『高麗史』・『元史』などが略式で記載されているのみで、具體的な出典は明示されていない。また、人物評價という括りから書かれているため、高麗のナショナリズムに合致するか否か、という形で毀譽褒貶が示されている。

第三章「十四世紀の高麗と日本の接觸と交流」。章題は「十四世紀」とあるが、實質的には一三世紀末から一四世紀末までの麗・日交渉であり、主に倭寇發生以後の一四世紀半ばからの外交に焦點をあてた労作である。「倭寇の侵入と被害、そして討伐だけが注目されてきた」高麗後期の麗・日關係を多角的な視座から描くことを意圖したものである。まず著者は、元寇後に麗・日開が疎遠となるとともに、高麗が一四世紀初頭から半世紀に亘って征東行省の掣肘を受けていたために自主的な政治・外交が制限されていたことを述べる。一四世紀の半ばから、恭愍王（在位…一三五一～一三七四）の下で「反元自主」の氣運が高まり、獨自外交が展開されるかに見えたが、一三五〇年代から倭寇の活動が盛んに興り始める。一聯の経過を示すため、著者は高麗・日本に關係する事項を年代順に表としてまとめる。一二九三年をもって公式な外交

が斷絶した後は、海商・求法僧による渡航、漂流民の送還等を通じた交流が細々とおこなわれていたが、一三六六年に倭寇の禁絶を求める使節が日本に派遣されたことをきっかけとして麗・日の國交が回復したとする。

元寇の際に日本の鎌倉政権がモンゴル・高麗に對して敵對的な姿勢を取り、政治的實權を持たない公家は變動する國際情勢に有効な對處がとれなかったのに對し、足利政権は高麗側の要求する倭寇禁壓を受諾した。公的な使節が相互に派遣されたわけではなく僧侶による非公式な交流に止まったが、その一方で相互の文化・學術的交流は促進される。こうした交流を重ねる中で足利幕府へ倭寇の禁壓を要請したところで實行には移されないことを理解した高麗側は、更に守護などの地方勢力へも働きかけを行うが、地方勢力も倭寇との關係から利益を享受していたこともあり、倭寇の勢力は衰えを見せなかった。

著者は、倭寇の起源を南北朝の争いで排斥された南朝勢力であるとみなす。倭寇は、九州に據った南朝派の懷良親王勢力が軍事物資を確保するために派遣した掠奪集團であるとし、一三八〇年代に倭寇の掠奪が衰微し始めることと併せて、懷良親王が一三八三年に死去したことを倭寇衰退の一因とする。また、日本に残る多くの高麗文物は、商人經由ではなく倭寇の掠奪の結果とみることが妥當であるとしつつ、これも一つの文物の交流として容認する考えを示した。最後に、一四世紀後半の倭寇禁壓を通じた非公式な交流が育まれたことが、一五世紀以後の朝鮮・日本の密接な交流の基盤になったとする。

終章「今後の課題」では、著者個人の課題ではなく、モンゴル史研究に關わる全ての研究者に向けての課題が説かれる。ユーラシアを席捲したモンゴルの研究は日本の學界が主導的な立場をとっていたが、近年の韓國・中國では、モンゴルにおける自國史という枠組みを乗り越え、より廣域の地理概念として北東アジアを念頭においた研究が進展している。モンゴル史の資料は多言語からなるだけでなく、世界各地に散在しているために個人による収集は不可能であることから、研究者同士の更なる聯携が必要であると説く。近年盛んに發見されつつある新出の金石文獻などが特定の研究機關で保存さ

れたまま長期公開されない閉鎖的な状況を批判し、少なくとも同一文化圏の學者間では資料が公開され共有されなければならぬとする。加えて、金石・書畫・古文書や考古學の成果を等閑視して典籍資料のみに没頭することなく、他分野との連携を積極的に行うように推奨する。その上で、新出資料の利用に際しては個人・國家の意圖と複雑に絡まって不適切な處理が施され、模造品が流通している可能性にも留意する必要があると説く。こうした状況に對處するためには、研究者が實地で資料調査を行うべきであり、その上で學際的な協力が不可欠であることを再度強調する。

附録では、日本滞在中に収集したモンゴル時代以外の資料の紹介を行う。第一章「京都大學所藏の開仙寺址石燈記の拓本」は、京都大學工學部建築學科の圖書館に保存される、同學科教授の天沼俊一（一八七六一—一九四七）が収集した中・韓・日の拓本一二〇餘種の中の「開仙寺址石燈記」についてあらためて考察を行ったものである。「開仙寺址石燈記」自体は、日本統治期の朝鮮で作成された『朝鮮金石總覽』やその後の『續金石遺文』に収録されているが、石燈の劣化のためか判讀の誤りが多いため、著者は天沼俊一が収集した拓本との比較を行うことで判讀の校正と檢討を行った。

第二章「一五七五年日本使臣團にかかわる古文書資料の檢討——足利學校遺蹟圖書館所藏『續資治通鑑綱目』の楷接紙調査——」は、足利文庫に保存された『續資治通鑑綱目』二七卷一三冊の装丁に使用された紙背文書の研究である。はじめに足利文庫所藏の『續資治通鑑綱目』を書誌學的に檢討し、一五〇四年に明で刊行されたものが朝鮮へ渡った後に日本へと輸入されたものであること、一五七一年に朝鮮で刊行された『續資治通鑑綱目』と同一の底本であることを明らかにする。その後、紙背文書の内容の本格的な檢討に移る。紙背文書には一五七五年に日本「國主」から朝鮮へ派遣された使臣團について記載されており、著者は群雄割據する戰國期の日本の状況を踏まえて使臣團の派遣主體を考察する。使臣團の構成、朝鮮側の對應を確認し、『朝鮮王朝實錄』に記録の無いことを明らかにした上で、使臣團を派遣したのは當時近畿一帯で大勢力を誇った織田信長ではなく對馬の宗氏であり、一五七五年の使節團は一五世紀から宗氏が盛んに派遣した「僞使」の一部であったと結論附けた。なお、序章での内容紹介には「本章によって豊臣秀吉による朝鮮侵攻が本人

の意思よりは彼の舊主であつた織田信長の意思を繼承したものであつた」ことを明らかにしたとあるが、本章を讀む限りでは一五七五年の朝鮮への使節が對馬宗氏の派遣した「僞使」であること以上に論を展開しておらず、豊臣秀吉に至つては一言も觸れていない。

評者はモンゴル時代の知識を齧つたにすぎず高麗に至つては門外漢であるため立ち入つた論評は控えたいが、二三の意見を述べておく。一三〜一四世紀のモンゴル、少なくとも大元ウルス、フレグウルスで共通化された諸要素（商業・行政・文化等）によつて、ユーラシア大陸は一定の文化的共通軸を有していた。⁽¹³⁾ そのユーラシアの東端に位置していたのが高麗と日本である。モンゴルの駙馬國である高麗はいうまでもなく、日本もモンゴルの文化的影響を強く受けていたことは僧侶の渡航歴、文物の將來などから確認できる。⁽¹⁴⁾ ユーラシアの大部がモンゴルの治下にはいり、各地に各ウルスの直轄領と投下領が入り交じる多重構造が生み出された。そうした状況に諸王・投下領主の獨立性、各宗教勢力、モンゴル貴族とその威を借りたオルトク商人、色目人・漢兒人・南人、さらには周邊地域の人々が加わり、モンゴルによる統合は擴充されてゆく。

一四世紀後半に高麗で編纂された漢兒言語の教科書である『老乞大』⁽¹⁵⁾には、高麗人商人が行きずりの漢兒人商人とともに大都まで高麗人參を賣りに行く情景が描かれる。これは教科書に掲載される一説話であるため實際のものとは隔たりがあるだろうが、當時の高麗・モンゴル間で頻繁に起こりえた場面を活寫したものであろう。モンゴル時代において日本・高麗のモンゴルとの接し方はそれぞれ異なつていたが、モンゴルの中でゆるやかに「混一」された北東アジアの情景がそこにあつたのである。従來の研究においてもモンゴル・高麗・日本の内、二者關係を抜き出したもの、一國史の枠組みの中で外交を語るものは幾多あるが、モンゴル時代の當該地域を語るのであれば三者に等しく目を向けようとする意識が肝要となる。著者の本書における姿勢は、如何せん著者の専門ゆえに高麗に比重が傾きがちではあるが、廣範な視野をもつ

て北東アジアという空間を活寫しようとする氣概に溢れている。

本書の主とするところは、網羅的な資料収集に基づく新資料の紹介と分析である。こうした作業によって、とりわけ第二部の忠宣王と周囲の活動については各時期の詳細な経緯が明瞭なものとなった。その過程で示されている数々の著者の創見については興味をそそられ首肯できるところも多いが、さらなる考證が必要であるようにも見受けられた。著者は高麗側に軸足を置き忠宣王をモンゴルに滞在する質子の高麗王として検討しているが、その一方で高麗王を数多いモンゴルの諸王・駙馬・投下領主として遇するモンゴル側の視點も有用な分析手段となり得ただろう。いづれにしろ、高麗王の駙馬としての特異性・仁宗期の立ち位置も踏まえたうえで言えば、忠宣王の記事は諸王の中でも多い部類に入り、他の諸王との比較對象になりうる存在であることは確かである。著者の論考は、忠宣王とその周囲に關して更なる研究の餘地が残されていることを感じさせてくれた。

本書の論考中における白眉は、なんといつても『異國出契』に所收される蒙・麗・日間の外交文書を紹介した第一部である。この論考の價値は、黑板勝美・中村榮孝の時點では資料上の制約（文書の蟲食い）により不完全であった研究の完成度を高めたという以上に、この資料の再發見そのものが日本史・中國史側での元寇・倭寇前史の議論を活性化させた點にある。¹⁶ 池内宏をはじめとする先學の研究の蓄積によつて停滞の感があつた元寇史についてはなおさらであろう。論考の發表と並行して蒙古襲來關係資料の集成作業が行われていることを見ても、著者の再發見は時宜にかなつたものと言える。新出の出土資料などとは違い、國家間の外交史資料は數が限られている上、往々にして過去の碩學による分析をへているために後世の論者は既存の資料の再解釋に終始しがちである。そうした狀況に、新資料という形で一石を投じて議論を進展させた著者の仕事は多大な意義を有している。

なお、各章に年表形式の資料一覽が附されているため當該時代の資料集としても便利である。冒頭で紹介した著者の著作群と突き合わせると、本書の價値はより一層高まるだろう。逆に言えば、自身の作成した資料集を前提としているため、

そちらを一通りあたらなければ本書で提供される年表に記された情報の成否が確認できない仕様となっている。

以上のように資料の紹介と分析という意味では十二分に成功しており、資料の収集に費やした著者の努力には脱帽せざるをえない。ただいくぶん資料の紹介を前面に押し出しすぎているきらいがあり、各論で何を證明せんとしたのかの論旨がやや漠然としたものになっている点は否めず、本書全体を見回したときに交流という以上の統一的なテーマも見出しがたかった。第二部から第三部にかかる各人物に關する論考においても、著者の見出した新資料によって従来の限られた資料のみ依據した研究では見えてこなかった具體的事實が克明に描きだされたことは確かだが、今一步踏み出して人物の具體像以上の展開を提示してもらえれば、更に深みのある論になりえたのではないだろうか。

しばしば繰り返される新資料の重要性はまさしくその通りであり、後進としての我々もその意識を胸に刻むべきだろう。モンゴル時代を採るうえで多言語と新資料を驅使した研究が今後更なる活況を見せることは言を俟たない。著者の勞苦に惜しめない贊美をおくり、擱筆する。

註

- (1) 張東翼『高麗後期外交史研究』(一潮閣、一九九四年)、
 同『元代麗史資料集録』(ソウル大學出版部、一九九七年)、
 同『宋代麗史資料集録』(ソウル大學出版部、二〇〇〇年)、
 同『日本古中世高麗資料研究』(ソウル大學出版部、二〇〇四年)。なお、本書に對して韓國で、日本史側の觀點から書評が出されている(남기하「書評」張東翼、《モンゴル帝國期の北東アジア》(汲古書院、二〇一六)、『日本歴史研究』第四三號、二〇一六年)。
- (2) 元寇についての代表的なものとして池内宏『元寇の新研究』(東洋文庫、一九三二年)。元寇の研究史については、川添昭二『蒙古襲來研究史論』(雄山閣、一九七七年)。倭寇については、田中健夫『中世海外交渉史の研究』(東京大學出版部、一九五九年)など。
- (3) 中村榮孝『日鮮關係史の研究』上卷(吉川弘文館、一九六五年)。
- (4) 池田榮史・根元謙次「長崎縣北松浦郡鷹島周邊海底に眠る元寇關聯遺跡・遺物の把握と解明」(『平成一八〜二二年度科學研究費補助金基盤研究(S)研究成果報告書』第一

- 集、二〇〇九年・第二集、二〇〇九年・第三集、二〇一一年)。
- (5) 杉山正明『モンゴル帝國と大元ウルス』(京都大學學術出版會、二〇〇四年)。
- (6) そうした研究の一例として、森平雅彦『モンゴル覇權下の高麗——帝國秩序と王國の對應——』(名古屋大學出版會、二〇一三年)、がある。
- (7) 榎本涉『東アジア海域と日中交流——九—一四世紀——』(吉川弘文館、二〇〇七年)。
- (8) 初出一覽(三二八—三二九頁)に「韓國、歴史教育論集」三五、一九九九年」とあるのを、原典に即して修正した。
- (9) 『異國出契』原本の所在は不明だが、筆寫本が内閣文庫と京都大學文學部圖書館に所藏される。
- (10) 黒板勝美・下村三四吉編『徵古文書』甲集(出版社不明、一八九六年)。
- (11) 中村榮孝「『太平記』に見える高麗人の來朝——武家政權外交接收の發端——」同『日鮮關係史の研究』上巻、第六章(吉川弘文館、一九六五年)。
- (12) 朝鮮總督府編『朝鮮金石總覽』上巻(朝鮮總督府、一九一九年)、黃壽永編『續金石遺文』(考古美術同人會、一九六七年)。
- (13) 宮紀子『モンゴル時代の出版文化』(名古屋大學出版會、二〇〇六年)。
- (14) 榎本涉『南宋・元代日中渡航僧傳記集成・附江戶時代における僧傳集積過程の研究』(勉誠出版、二〇一三年)。
- (15) 金文京・玄幸子・佐藤晴彦譯註『老乞大——朝鮮中世の中國語會話讀本』(鄭光解説)(平凡社、二〇〇二年)。
- (16) 植松正『モンゴル國圖書の周邊』(『史窓』第六四號、二〇〇七年)、同『第二次日本遠征後の元・麗・日關係外交文書について』(『東方學報』第九〇號、二〇一六年)、池田榮史等『『元寇』關係史料集(稿)』(科學研究費補助金(基盤研究(S))研究成果報告書、二〇一〇年)、石井正敏「貞治六年の高麗使と高麗牒狀について」(『中央大學文學部紀要』第五五號、二〇一〇年)、佐伯弘次『東アジアにおけるモンゴル襲來關係地資料集』(九州大學大學院人文科學研究院、科學研究費補助金(基盤研究(S))研究成果報告書、二〇一四年)、同『蒙古襲來以後の日本の對高麗關係』(『史淵』第一五三號、二〇一六年)など。